退職教授 インタビュー

Mudskippers
第 43 号
2015年 2 月発行
佐賀大学医学部
〒849-8501
佐賀市鍋島 5 丁目 1 番 1 号
http://www.saga-med.ac.jp/
新聞編集委員会
印刷／㈱昭和堂

組織・神経解剖学分野
教授
増子 貞彦先生

――最初に、先生が解剖学を専攻された経緯を教えてください

これまでを一言で振り返ると「行きあたり場当たり」と言えるでしょう。

高校生の頃、動物学を学びたいと担任に相談したところ「君の実家に資産はあるの？」と尋ねられました。ありませんと答えると「それじゃ食べていけないよ」の一言。その先生自身、いろいろな苦労を経て教師になったそうで、研究職を生業にすることの難しさを教えてくれたんでしょうね。そこで動物園専属の獣医師になろうと考え、東京農工大学の獣医学科に入学しました。教養課程の2年間は時間に余裕があったので、友人らと上野動物園へ話を聞きに行ってみました。動物園は環境省の管轄下で〝専属獣医のポストは退職で空きが出ないとね…〟とのこと。ショックでしたね。そこで今度は牧場を経営してみようか！と考え（笑）、夏休みを利用して家畜農場や畜産獣医を訪ねてみました。ところがウシの難産やエサの乾草作りを体験するうちに、畜産業の大変さを思い知ったんですよ。牧場を経営するだけの資産があるわけでもなく、これも上手くいかないなとあきらめました。

専門課程ではいろいろな教室を選べたのですが、実地訓練ができる臨床系、それも派手めの外科系に進みました。卒業までの2年間で小さな手術もいくつかこなせるようになりましたが、卒後の進路を考えたとき、どうしても就職したくないという気持ちが強くなったんですよ。時間に追われてdutyをこなすことが嫌だったからでしょうね。いわゆる〝ピーターパン症候群（大人になりきれない大人）〟だったのかなと、今では懐かしく思い出します（笑）。

そこで何とか大学に残ることを考え大学院修士課程に進学したんですが、ここで早々に1つ目の転機が訪れました。「教務員のポストが空いたけど、どうする？」と言われたんですよ。給料を貰いながら研究ができるなんて素晴らしいことだと思い快諾しました。最初は小動物を中心に数多くの手術、治療を手がけ、とても楽しかったんですが、病気の動物は飼い主の意思により安楽死となったり助かったり…。動物がいくら生きたいと思っていても、飼い主の気持ちや経済力が最優先されることに次第に違和感を覚えるようになりました。

そして教務員2年目のある日、2つ目の転機がやって来ました。千葉大学医学部の解剖学講座助手の話が回ってきたんです。農工大の先生方の助言もあって、医学部教官へと大転身しました。

――そこから解剖学者としての人生がスタートしたんですね

人体解剖の経験は皆無だったんですが、福山右門教授の指導の下、1年目は医学生と共に解剖学に関する講義、実習を全て受け、寝る間も惜しんで勉強しました。その甲斐あって2年目には学生に指導できるようになり、解剖実習では剖出の助っ人として引っ張りだこになりました。外科医としての経験に加えて、剖出するセンスもあったんでしょうか（笑）。

解剖実習に加え、ご遺体の引き取り、防腐処置など毎日のようにご遺体と接していたためでしょうか、この時期から〝死生観〟についても考えるようになりました。「朝に道を聞かば夕べに死すとも可なり」という論語を勝手にもじって、「朝に生まれて夕べに死す」というつもりで一日一日を大切に生きよう、そう思えるようになったのもこの頃からですね。福永武彦の長編小説「死の島」からの一節、「人はその人を知る人の死によって死ぬ」にも心を打たれました。解剖実習で身につけたことを自分が死ぬまで忘れず持ち続けることが、ご遺体と共に生きるということなのだと。30年間の教員生活を考えると、年間100人として3千人の教え子たちが「あんな教員もいたなぁ」と思い出してくれれば、私も皆さんの中で生きられます。そうなったら本望ですね。

――当時の研究活動についても教えてください

福山教授の退官後、助教授から教授に昇進された嶋田裕（ゆたか）先生に研究指導を受けました。先生は当時「Above the level」を目指せ！」とよく言っておられ、私も非常に感化されましたね。与えられた研究テーマは運動神経細胞を単離培養した後、混合培養の条件下で神経と筋のシナプスを形成する実験モデルを確立することでした。そのために、まず骨格筋細胞の培養法や走査型電子顕微鏡の扱い方をマスターしました。当時、電子顕微鏡を製造していた日立の工場に足しげく通ったことを思い出します。

問題は運動ニューロンの単離方法だったんですが、脊髄の運動神経細胞は他のニューロンよりも一番早い時期に分化するpostmitoticな細胞なので、その時期（ニワトリ2・5日胚）に脊髄を取り出し、DNA合成酵素阻害剤を作用させて生き残った細胞を培養すれば、運動神経細胞を分離できると考えたんですよ。手先の器用さを要求される非常に細かい手技でしたが、なんとか分離に成功し、培養筋細胞とシナプス形成することを生理学的にも証明できました。実は、ライバルがこの1年前に別の方法を用いて同じテーマに関する論文を発表していたんですが、我々の方が理路整然としていると評価され、論文はPNAS（編者注：米国の一流科学雑誌）に掲載されました。当時私は、この雑誌の価値を理解していなかったんですが、周りの人たちから「でかした、増子！」と言われたのを覚えています。

そんな中、パデュー大学（編者注：米国インディアナ州にある名門校）から留学の誘いが来たんですよ。当時は帰国後の職の保証はなく、不安でしたが思い切って渡米を決心しました。ところが、ほぼ時を同じくして3つ目の転機が突然訪れたんですね。解剖学会に出張した際の出来事です。昼休みに嶋田教授と私、そして以前に千葉大から佐賀医大へ転出されていた千葉教授の3人でラーメンを食べていると、「佐賀医大が開学6年目で大学院を設置する。しかし教官が1人辞めるので来ないか？」とスカウトされたんです。〝何という幸運。帰国後の職も保証され、渡りに船だ〟と考え、即決しました。しかし、そこからが大変。留学前に転任の手続きを踏まなければならず、家族を残して佐賀医大のカステラハウス（編者注：八戸溝の医大宿舎。平たい屋根が茶色、外壁が黄色であったため、この愛称で呼ばれた）に単身で引っ越しました。バタバタと佐賀と千葉を往復する生活が続き、移動中が唯一の睡眠時間でしたね（笑）。

パデュー大学では、中島泰子先生に研究指導を受けました。泰子先生に加え、ご主人の重広先生、テクニシャンのサラ、院生のベッキーに私という小所帯のラボでしたが、青斑核の線形細胞を分離培養し、その細胞について生理学的解析を行うなど様々な経験ができました。研究だけに没頭できた楽しい1年間でしたよ。

――雑用もなく研究に専念できるなんて、羨ましい限りです

帰国後、培養系から自律神経系の研究にシフトしました。In vitro（編者注：試験管内での実験系）では様々な現象が起きるけれども、in vivo（編者注：生体内の意。in vitroに対応する用語）でその現象が本当に生じているのだろうか？そんなことを考えるようになったんです。千葉教授をはじめ、現在看護学科教授の河野先生や村田先生と一緒に研究を開始し、神経トレース法、免疫組織化学法やシナプス解析法など、様々なテクニックを習得しました。研究テーマとしては、神経切断実験を応用して自律神経系と臓器の繋がりを解析しようと考えました。肉眼解剖の経験があったから、中枢神経系の研究より取っ付きやすかったんでしょうね。

天山おろし

本来は子守用ロボット。ネコ型をした彼の愛称は「ドラえもん」だ。彼はお腹にある四次元ポケットの中に、実にわくわくさせられる「ひみつ道具」を隠し持っている。千種を超す道具があのお腹のどこにと思うが、それらは四次元空間に保管してあるという。漫画に描かれる空想の世界に突っ込みを入れるのも野暮というものだ。

ところが、そのファンタジーの世界への挑戦者が現れた。「どうだ、ドラえもん」の合言葉を力に、ひみつ道具を作るというプロジェクトである。第一弾はセルフ将棋。一人遊び用の将棋ロボットで難易度自在、成駒（駒を裏返すこと）も可能だという。そして第二弾が望遠メガフォン。照準を合わせてしゃべると、遠く離れた相手の耳元にピンポイントで声が届く。いずれも堅実な物作りに徹してきた中堅中小企業数社が、それぞれの技術やノウハウを連携して実現に成功した。22世紀の道具を21世紀の今、作ることに成功したのである。

昨年12月3日、はやぶさ2が無事打ち上げられた。2018年に小惑星1999JU3へ到着、2020年に地球へ帰還することがミッションである。地中のサンプル採取時には人工的にクレーターを作る。このときに活躍するのが爆薬を収めている衝突装置で、福島県で活躍する複数の企業が連携して作り上げた。東日本大震災による操業停止などの困難を乗り越えて、まさに執念である。

昨年、ノーベル物理学賞を受賞した赤崎勇・名城大終身教授、天野浩・名大教授、中村修二・米カリフォルニア大教授らの尽力で、窒化ガリウムの均一な結晶化が成功し、「20世紀中にはできない」とされていた青色LEDが実用化された。結晶化成功の裏にはトラブルもあったようだ。NHK・解説アーカイブス2014・10・09の記事によると、天野教授が半導体の結晶を作る際、炉が故障して温度が上がらなくなった。そこで低い温度で実験してみたところ、青色LEDに必要な結晶ができたという。記者の「棚からぼた餅ですね」との言葉に、天野教授は「落ちてきたときに棚の下にいないと、ぼた餅は手に入りません」と答えている。

はやぶさや青色LED、あるいはひみつ道具もそうだが、世界に冠たる製品には、日本各地の中小工場から送り出される製品が多い。一昨年話題となった銀行を舞台にしたドラマで、主人公の父親が作っていた樹脂製ネジもその一つに違いない。このような人たちの活躍を見聞きすると、信念を持って事に当たり、失敗を恐れるな、失敗を見捨てるな、可能性を見逃すな、チャンスを逃すな、そして連携プレイに勝るものなしということを改めて肝に銘じる次第である。

ところで、私にとってのドラえもんは大山のぶ代さん。みなさんは？

（河野）

私が佐賀医大に赴任して数年後、千葉教授が突然千葉大に戻ることになり、教授不在の時期が1年間続きました。その時は解剖学関連の講義実習をすべて担当させられて大変でしたが、良い経験だったと思います。

その後幸運なことに、私は教授に昇任しました。様々な診療科や外国から大学院生、研究生が集まり賑やかでしたね。高学年の学生さん方はご存知の李明子先生は手先がとても器用でした。イヌの後腹膜を試料として、自律神経叢を緻密な手作業で丁寧に掘り出して、叢内の神経細胞を網羅的に解析してくれたんですよ。

――先生の試験は厳しいと、学生さんから聞いていましたが…

毎年5科目を超える講義・実習に加え、試験作成、採点に追われる日々が続きましたが、出題形式はあえて採点に手間のかかる記述式にしました。ただ知識があるだけでは意味がありませんからね。その知識を使って〝考える力〟を身に付けてほしかったんですよ。どういう勉強をしたらよいのか自分で見つけてほしいというメッセージも込めていましたが、学生さんの習性を考慮して、過去問に類似の問題（定食）に加えて、新メニューの問題を必ず出すようにしました（笑）。

――大学の制度・運営面でも、苦労されたらしいですね

学修レベルを落とさないようにバリア制度の導入を検討し、実行しました。開学当初から平成8年までの18年間、留年制度が無かったので、たとえば卒業時点で組織学の再試を受ける学生さんが沢山いたんですよ。議論に議論を重ねたことを思い出します。また、PBL教育の導入にも力を入れましたね。平成12年のカリキュラム改革で、3年生からPBLを実施することになり、平成20年の改革で他の授業科目を2年生に移行したために、現在の過密カリキュラムができてしまったわけですが…（汗）。あとは大学統合、法人化の波に飲まれ佐賀大学医学部が誕生する中で、評価室長として法人評価を担当したり、学長補佐として中期目標の計画を作ったことですかね。本当に苦労しましたよ（現在進行中）。

――佐賀医大時代の楽しかった思い出は？

当初は馬術部の仲間と馬に乗り、その後はワンダーフォーゲル部の顧問として近くの小山によく登っていました。屋久島に遠征したことも良い想い出です。

――現在と昔の学生さんを比べて、変わったなと思うことは？

基本的には何も変わらないと思いますが、昔は自分で食べていく術を身に付けることが先決でしたからね。今はあらゆるものが飽和状態で、目標を立てづらいと思うんです。私の経歴からして「目標に向かって突き進め」という偉そうなことは言えませんが（笑）。今は「何ができるか」というより「何かに対応する力」が大切だと思うんです。置かれた環境や立場でどう自分を活かしていけるのか、ということを考えてほしいですね。

――座右の銘は？

先ほどの「朝に生まれて夕べに死す」と、Que Sera,Sera（ケセラセラ）です。「なるようになるさ」と思うことも大切ですよ。Above the level もそうですね。「ベストを尽くせ」だと重たすぎるんです。トップになれなかったら「ダメだ」ってへこんじゃうけど、above the level だと個々人で水準を決められますからね。何か一つキラッと輝けるようなものを持てたら良いと思うんです。これは大学にも言えることで、ちょっと飛び出てないと質のいい学生さんも集まりませんよね。

――ご趣味は？

我が家には小さな畑と実の成る木があり、その手入れが趣味です。ソラマメやエンドウマメはビールのつまみになりますし（笑）。夏野菜も作ってますよ。果物ではサクランボ、プラム、ビワ、イチジク、ブルーベリーなどが獲れ、ジャムにもします。「実のならぬ木は意味がない」という信念で庭造りをしてます。もう一つの楽しみとして、クリークから正体不明の稚魚を捕まえて飼育しています。将来どんな魚になるのか楽しみなんですよ。メダカ、タナゴ、モロコ、ハヤ、ドジョウ、ドンコ…などいろいろな成魚になりましたが、そのせいで我が家には水槽がいくつもあります（笑）。

――退職後の目標は？

今まで出来なかった事をやってみようと決めています。これまでは大学中心の生活で、息子たちからは「母子家庭だった」とも言われました。一説によれば日本人男性の健康寿命は70・4歳ですから、それを考えるとあと5年ほどしかありません。健康なうちに今までやり残してきたこと、捨ててきたことを拾い上げて「自由人」として第3の人生を歩みたいですね。

――今後の佐賀大学医学部に期待する事は？

開学当初より本学は地域医療をブランドにしてきましたが、現在は他の大学も同じ傾向にあります。そこで〝元祖・地域医療推進大学〟として頑張ってほしいですね。私も佐賀の医療を享受することになりますので…（笑）。

――最後に学生さんにメッセージをお願いします

自分の納得できる方向を模索し、above the level の精神で頑張って下さい。「単位を取るため」あるいは「卒業するため」の勉強ではなく、「自分のため」に勉強しましょう。コマーシャルの「ファイトー！一発」ではなく、中島みゆきの「ファイト♪」と心で歌いながら、皆さんのことを応援しています。

――いろいろなお話をありがとうございました。

聞き手　村田祐造先生・柴田健太郎

退職教授挨拶

退職にあたり

泌尿器科学講座
教授
魚住　二郎先生

平成27年4月で佐賀大学を退職することになりました。3月末ではなく、なぜ4月末なのか疑問に思われるかもしれませんが、私にとりましては節目の時となります。私は、平成17年5月1日付けで泌尿器科学講座の教授を拝命いたしましたので、平成27年4月30日で10年の任期が満了いたします。これを機に、長い大学勤務に一応の終止符を打つことといたしました。これからの佐賀大学医学部を担っていかれる若い先生方や学生の皆さんに何らかのメッセージを残せたらという思いから、これまでの道のりを振り返ってみました。

私は、1972年（昭和47年）に九州大学医学部に入学いたしました。日本中を吹き荒れた大学紛争はほぼ終息していましたが、2年間の教養課程を過ごした九大の六本松キャンパスにはまだ大学紛争の名残があり、キャンパス内ではヘルメット集団のいざこざが時折見受けられる時代でした。勉強は片手間で、旅行、お酒、麻雀などの一般教養に親しむ時間も長く、現在の医学部のカリキュラムからは想像もできないような自由な時を過ごしました。医学部に進学すると解剖学を皮切りに基礎医学の講義が始まり、臨床医学の系統講義、臨床実習と続く過密カリキュラムの中で必死にもがいていたような気がします。6年間の学生時代に、勉学だけではなく多くの遊びを通して時間を共有した同級生たちは、現在それぞれの専門分野で指導的な立場や地域医療の柱として活躍しております。40年以上経過した今でも交友関係は続いており、私にとりましては貴重な財産です。学生の皆さんには、大学を一生の友を作る貴重な場として活かし、有意義な学生生活を送っていただきたいと思います。

1978年に大学を卒業して、九州大学の泌尿器科に入局しました。専門性や将来性を深く考えての選択ではなく、当時もそして現在も続いている泌尿器科という診療科の自由な雰囲気に惹かれての入局でした。2年間の臨床研修の後、1980年から4年間、大学院生として九州大学医学部附属癌研究施設（現生体防御医学研究所）で研究生活を送りました。まっすぐに臨床の世界に進んでいった同期入局者が臨床医として修練を積んで行く中で、何の役に立つのか見通しのつかない動物実験に明け暮れて4年間が過ぎました。当初は臨床から取り残された生活に焦りを感じていましたが、大学院4年目には半ば開き直るような気持ちで、遅れついでに留学も経験してみたいと思うようになりました。大学院修了後、幸運にも米国の国立衛生研究所（National Institutes of Health, NIH）の客員研究員のポストに在りつくことができました。2年間の留学生活は、経済的にも、研究能力においても、英語でのコミュニケーション能力においても不自由極まりない苦しいものでしたが、家族、友人、研究室の関係者の方々のお蔭で何とか研究期間を全うすることができました。大学院と留学先での研究生活6年間は今にして思えば貴重な経験で、その後の人生に大きな影響を与えました。

泌尿器科を離れることによって泌尿器科を外から見ることができましたし、日本を離れることにより、日本の医学のみならず日本という国のあり方を考えるいい機会になりました。若い先生方はどうしても目の前の臨床修練という目標に捉われがちですが、30年いや40年にわたって医師として活動するであろうことを考えれば、若い時の寄り道は是非とも経験していただきたいと思います。研究の成果が直接臨床に反映されることはまずないでしょうが、研究に取り組む過程で、問題の本質を見抜く力、論理的な思考力、解決策を求める探究心を身につけることは、臨床医として生きて行く上で極めて重要な要素です。臨床医を目指す人こそ、若い時に研究に取り組んでいただきたいと思います。

6年間のブランクの後、関連病院での臨床を4年間経験し、九大泌尿器科に助手として戻ったのは卒後13年目のことでした。診療、研究、教育、さらには医局という組織のマネジメント業務でそれなりに充実した時間を過ごしました。当時の九大泌尿器科の教授は、佐賀医科大学の初代教授でもあった熊澤淨一先生でした。物事の大原則を示して詳細は任せるという「丸投げ方式」の人材育成法で育てられ、8年余りを過ごしました。

1998年（平成10年）11月1日付けで佐賀医科大学に赴任しました。眞崎善二郎教授のもとで6年半助教授を務めました。助教授という席はいわゆる中間管理職的なポストで、責任が重い割には実権がないポジションと言われていますが、眞崎教授は、診療、研究、教育のどの分野に関しても対等な立場から指導をして下さいました。言いたいことも言わせてもらい、やりたいことをやらせていただきました。今にして思えば、25年余りの長い大学生活の中で最も充実した時間であったように思います。

2005年（平成17年）に教授に昇任してからは、学内の会議や学会関連の業務も多くなり、相対的に臨床の仕事が少なくなりました。それが教授の仕事と言われればそれまでですが、やや寂しい思いを感じることもありました。ふと気が付くと病棟業務はもちろんのこと、外来業務でさえ医局の若い先生方のサポートなしには一人では何もできないような状況になっていました。教授職に就いてから10年、それなりに努力を重ねてきたつもりではありますが、医局の発展、大学の運営にどれだけ寄与できたか、後進の先生方に十分な指導ができたかを考えると、忸怩たる思いもいたします。

今はただ、泌尿器科の医局の先生方、また関連病院の関係者の皆様、大学の関係者の皆様に感謝するのみです。

大学を取り巻く環境は、財政的にも社会的にも年々厳しい状況に向かっています。医学部の教官は、高度で安全な医療を提供し、医学の発展に寄与するような研究を推進し、将来の医療人を育成するという多くの使命を担っているわけですが、この年々厳しくなって行く環境の中でこれらの職責を果たして行くには多大な努力と忍耐が必要です。大学人の活動に対しては何かにつけて種々の制約が加えられてきましたが、医学部にはまだ自由が残っているようにも思います。ここはひとつ開き直りの気持ちが重要かもしれません。大学という組織を利用して自分のやりたいことをやる、自分の信じる目標に向かって行動するという姿勢で臨むのがよいと思います。学生の皆さん、若い教職員の皆様の今後のご活躍と佐賀大学医学部の発展を祈念いたします。

新任教授挨拶

成人・老年看護学講座
教授
田渕 康子先生

皆さん、こんにちは。平成26年8月1日付で看護学科成人・老年看護学講座老年看護分野教授に就任いたしました田渕康子と申します。私は平成20年5月に同講座の准教授として着任いたしましたので、佐賀大学に勤務して7年目になります。この度、前任の藤田君支教授の後を引き継がせて頂くことになりました。

私は長崎県佐世保市の出身で、地元の高校を卒業後に東京都立看護専門学校で看護の基礎教育を受けました。学生の頃に受けた教育で最も鮮明に覚えているのは、1年前期からスタートした解剖学の授業です。教えて頂いた先生は、当時東京都監察医務院で監察医をしておられた上野正彦先生です。学生の皆さんはご存じないかもしれませんが、数年前までは猟奇的殺人や変死などの事件の際にテレビでよくお見かけした著名な先生です。上野先生は法医学がご専門ですので、事故や事件でお亡くなりになられたご遺体の解剖写真を教室のスクリーンに映して解剖学の授業をされました。大規模なホテル火災で亡くなられた方の事例では、気管や気管支、肺など呼吸器の解剖写真を供覧され、火災の煤が気管や気管支に付着している所見から、死因は一酸化炭素中毒によるものであること、火事に見せかけた殺人事件など、呼吸が止まった状態では気管に煤が見られないことなどを説明されました。生活反応という言葉も初めて聞き、些細な傷で血がにじんだりするたびに〝生活反応＝生きている証〟と考えるようになりました。解剖の結果、亡くなられた女性の妊娠が確認されたことで、親子二人の賠償金が請求できることになり、解剖とは人権を守ることでもあるという話も伺いました。その他にも沢山の事例をもとに人体の解剖を教えて頂き、私は改めて人の臓器の精巧さや崇高さを実感するとともに、命の大切さを学びました。もう一つ衝撃を受けた授業があります。それは今となっては単純なことですが、成人看護学の消化器系の授業で自分の排泄物を毎日観察しなさいという課題でした。自分の排泄物を見るなんて「えっ、嫌だ」と思いましたが、自分が口から食べた食物が、消化・分解・吸収という大仕事を終えて排泄物として体外に出た後にも健康に関する貴重な情報を与えてくれることに感動しました。私は今も排泄物を念入りに観察することを怠りません。

看護師免許を取得後は、地元に戻り佐世保市立総合病院に就職しました。3年目までは耳鼻咽喉科・眼科・皮膚科などの混合病棟に勤務しました。喉頭・舌・上顎洞などのがんの患者さまが多数おられましたので、そういった方々と必死に向き合う毎日でした。そのような中、患者さまが受けておられる手術療法が、実際にどのように行われているのか知りたいと思うようになり、休日や夜勤明けに手術の見学に通っていました。これがきっかけで手術室に勤務移動することになり、約8年間、手術室看護師として臨床経験を積みました。手術室に配属されてからは、先生方や先輩方に叱られないように手術の手順や麻酔のことを覚えるのに必死で、その日の復習と翌日の予習に追われる毎日でした。術野をよく見て医師の手術操作を予測し、先生が手を出された瞬間、先生の言葉より早くその手に〝ぱっ〟と手術器具を渡しながら心の中で「よっしゃっ」とつぶやいたり、叱られては落ち込んだりの繰り返しでした。当時、「手術室には看護がない」という人がいましたが、本当にそうなのだろうか…とよく考えていました。手術を受けるなんて誰もが普通に経験することではありません。患者さまにとっては一世一代の大仕事、手術の大小にかかわらず、命がけの治療であることがほとんどです。手術を何事もなく順調に終えることができるように最大限の努力を払うことこそ、看護師の役割であると私は考えていました。そして手術室看護の意味を見出し、心を込めて手術を担当させて頂くために、術前訪問や術後訪問を業務の中に取り入れました。20歳前半からアラサー時代、体力も精神力もあふれていたように思います。

手術室の経験を経て、私は看護教育の道に進むことになりました。佐世保市立看護専門学校へ異動になり、教員養成講習を受講した後、専任教員として5年間の経験を積みました。看護学校では、まず基礎看護技術の「清潔」の単元を担当することになりました。「清潔」の単元はシーツ交換に始まり、寝衣交換、清拭や洗髪など身体の清潔を保持するための基本的な技術を教授する科目です。手術室勤務が長かった私は、寝衣交換も清拭も洗髪もほとんどしていませんでしたから大変です。職場から浴衣やケリーパッドを持ち帰り、家族の協力を得て連日練習に励みました。看護学校での5年間は実習と講義とカリキュラム運営に追われる毎日で、物事をじっくりと考える余裕が持てず、大学院への進学を決意しました。修士課程修了後は、福岡県立大学看護学部で4年間、成人・老年看護学講座の助手・講師として働き、縁あって佐賀大学に就職することになりました。

現在、私は老年看護学を専門にしています。老年看護の道に進んだ理由の一つは、福岡県立大学で老年看護学の実習を担当する中で「高齢者の魅力」に取りつかれたことです。私たちが想像もつかないような苦労を経験し、その中で人生を重ね、身体的な機能低下はあったとしても、生き生きと人生を語られる高齢者の方々と接する中で、私もこんなふうに歳を重ねたい、あんな人になりたい…と感じるようになりました。高齢者から学び、そして高齢者が生き生きと生活し、最期の時を穏やかに迎えられるために役に立ちたいと思っています。

研究活動は高齢者のQOLを中心テーマとし、認知症高齢者の補完代替療法に関する実証研究、人工関節置換術患者の身体活動量やQOL調査などに取り組んでいます。前者の研究では、実習施設の協力のもとに4年生の統合実習で学生が様々な介入を行い、主観的指標や生理学的指標を用いて評価する取り組みを行っています。後者の研究では、前任の藤田教授とともに医学科整形外科学講座との共同研究に取り組み、今後も長期間に渡るデータを蓄積し、高齢者のQOL向上に寄与していきたいと思っています。

社会貢献活動として、認知症の人と家族の会のメンバーとともに、認知症カフェ（カフェ・オレンジ）や介護経験交流会の開催、認知症コールセンター相談員など様々な活動に参加し、認知症の方々と家族が安心して暮らせるまちづくりを模索しています。その他にも、小城まちなか保健室の運営に携わっています。小城まちなか保健室は、年齢や疾患の枠にとらわれず、地域の人々の健康や生活を支援することが目的です。2025年問題に象徴されるように超高齢社会をどう迎えるか、日本の保健医療福祉対策は重要な問題に直面しています。誰もが安心して暮らせる社会の構築に向けて、様々なことにチャレンジしていきたいと考えています。カフェ・オレンジや介護経験交流会、小城まちなか保健室に興味のある方は、遠慮なくご連絡ください。皆さんと一緒に、超高齢社会問題に取り組んでいきたいと思います。

学食の想い出

～幻のグリーンカレー

皆さんがよく利用していた学生食堂。突然のことで驚いたが、1月23日をもって営業が終了した。聞けば佐賀医科大学の開学以来、35年の長きにわたって学生、教職員に食事や弁当を提供してきたとの事。まさに〝縁の下の力持ち〟として、大学の発展を支えてくれた存在であった。従業員の皆さんには「ありがとうございました」と厚く御礼申し上げたい。

学食で最も印象に残っているメニューは？と尋ねられれば、私は躊躇なく「グリーンカレー」と答える。食すのにハードルが多少高かったのも印象深い理由の一つだ。まず何よりタイミングである。というのも、このメニュー、週一回しか出ないのだが、どの曜日に出るのか分からない。ドラゴンクエストで言えば、メタルスライムに遭遇する確率ではないか。もう一点、気になるお値段は？と言えば565円で、大盛りを頼めば595円。貧乏学生の身にとっては少々高級志向の一品であった。

さて、ようやく巡り会えたカレーであるが、まずは見た目で料理を味わうのも楽しみの一つ。グリーンと言えども、ルー自体は茶色っぽい。赤・黄・緑のピーマンに、輪切りにされたズッキーニと色とりどりだ。おまけに4尾のエビが華やかに躍っている。

さぁ一口目。全然辛くない…と油断していると、後から強烈な辛さが口の中を襲ってくる。しかし心地よい爽やかな辛さである。嚥下した後には、それは軽い甘さに変わる。ココナッツミルクの魔法だろうか。もはや口に運ぶ手の動きは止まらず、付け加えるべき感想も出て来ないまま、アッという間に完食してしまった。胃も心も満腹である。

実は私、タイにて本場のグリーンカレーを味わったことがある。彼の地ではスープ料理なのだが、何とも日本人受けしない独特な味がして非常に辛く、とても完食できなかった。その意味で学食の一品はとても食べやすかったのだが、もはや幻のメニューとなってしまい、一抹の寂しさを拭えない。ぜひ皆さんもどこかで異国気分を味わってみてはいかがだろうか。

（岩永）

編集部からのお知らせ

医学部学生新聞では記事を随時募集しています。研究室での実習体験、課外活動報告、音楽・書籍評論、グルメ情報、あるいは身の回りの出来事に題材をとったエッセイなど、なんでも結構です。旅先で撮影したお気に入り風景写真の一葉でも歓迎です。ぜひ活字媒体にして一生の想い出を作ってみませんか。記事は電子ファイルで編集長までお送り下さい（kura@cc.saga-u.ac.jp）。同時に学生編集委員も募集しています。Dutyは最低限ですので、兼部もまったく問題ありません。医学部の歴史に名を刻もうという情熱あふれる学生さん、ぜひ門を叩いて下さい。

（倉岡）

キャロリングでクリスマスを祝う

12月22日の夜、附属病院の病棟でクリスマス・キャロリングが行われました。この催しは、混声合唱部のメンバーらがイエス・キリストの誕生と関係した内容の聖歌を歌いながら院内をまわり、聖日を祝うものです。照明を落とし、キャンドルの明かりが醸し出す厳かな雰囲気の中、美しい歌声が響き渡っていました。

曲目は、「天なる神には」「神のみ子は今宵しも」「もろびとこぞりて」「牧人羊を」「荒野の果てに」「ノエルノエル」「きよしこの夜」の7曲でした。当初は参加予定者が少なく開催が危ぶまれましたが、当日は医師や看護師、また入院患者さんもキャロリングの協力をしたり一緒に歌ったりして、フロア全体が一体となりクリスマスの訪れを祝いました。

毎年恒例となっているこのイベントですが、患者さんは合唱部メンバーの歌声を大変楽しみにしています。今回も廊下に早々と出て、メンバーの訪れを今か今かと待っていました。「長い入院生活の中、元気にキャロリングを見ることを目標に頑張ってきた。感動しました。本当にありがとうございます」と涙ながらに語る患者さんもいらっしゃいました。

参加した学生は、「学生のこういった活動が一瞬でも患者さんの力となっていることを実感し、参加してよかったと思う。今後も活動を続けたい」と話していました。混声合唱部は小所帯ですが、こうした素敵なイベントを精力的に行っています。また来年も美しい歌声が聞けることを楽しみにしています。

（大野・西原）

小児科病棟 X'mas会

12月22日、佐賀大学病院小児科病棟で、病棟主催のクリスマス会が行われました。この会には、小児科訪問サークルHappinessもボランティアとして参加しました。会場は看護師、病棟保育士の皆さん、そしてHappinessのメンバーにより飾り付けが施され、子供たちは華やかなイルミネーションやクリスマスツリーに目を輝かせていました。

看護師さんからは画用紙のクリスマスツリー作りと、現在大人気のアニメ・妖怪ウォッチより「ようかい体操第一」の出し物がありました。ツリーの飾り付けや看護師さんの踊りに、子供たちは大はしゃぎでノリノリの様子でした。Happinessの出し物はクリスマスソングで、その中の「きらきら星」では子供たちも一緒に歌って踊って楽しみました。そして最後に本物の（!?）サンタさんが登場！子供たちはたくさんのプレゼントに大喜びです。栄養部からは、可愛らしいクリスマスケーキもプレゼントされました。

入院中の子供たちにとって、クリスマスを自分の家で過ごせないのはとても残念なことです。病棟保育士の皆さんを中心に、医師、看護師など多くの方が、子供たちに少しでも楽しんでもらおうとこの会を企画しました。今回のクリスマス会が、子供たちの楽しい思い出になるといいですね。

（藤田）

［お知らせ］ 小児科訪問サークルHappinessでは、現在メンバーを大募集しています。月に1回ほど小児科病棟を訪問し、行事のお手伝いなどを通して子供たちと交流しています。Happinessの活動に少しでも興味を持ってくださった方、ぜひ私たちと一緒に活動しましょう！

〈連絡先〉医学科3年　白浜かおり　uyns.kao-ekars.ranico056@ezwebne.jp

選択コース体験記

医学科3年
加地 崇裕

私は、基礎医学系の神経解剖・組織学分野で4週間の選択コースを履修しました。皆さんの参考として少しでもお役にたてればと思い、その体験を報告します。

そもそも私の場合、〝研究ってどないなことすんのかな？〟って漠然と考えていました。医学部といっても医者が唯一の進路ではなく、研究者など様々な道があります。医者以外のイメージが何となく湧かなかったのが、このコースを選んだ最大の理由でした。モチベーションの低さにおそらく先生は困っただろうと思いますが、いろいろと懇切丁寧に指導していただきました。

主に行ったことは、組織標本の作製や免疫組織化学です。具体的には、皆さんが2年生で学ぶ組織学の顕微鏡標本を作ったり、その標本を染色したり、特定の物質に反応する酵素で染色してみたりといったことです。って言えば一瞬ですが、標本にする臓器を取り出すためのラットの解剖や、実験条件として術後1週間生存させるための縫合も行いました。特に慣れない身にとって縫合は難しい作業で、される側より自分の方が死にそうでした（笑）。また、この選択コースを受講して言えることは、組織標本に、折れ、重なり、破れなどがあっても、絶対に文句を言ってはならないってことです。いやほんとに。〝ほんならいっぺん作ってみる？〟ってなります。

選択コースを受けると、厳しい何かが待ち受けていると思っているそこのあなた、そんなことございません。どの研究室も普段の雰囲気は優しいものです。実験は難しいことがあるかもしれませんが、どんな質問にも快く対応してくださるので大丈夫です。また、先生にもよるでしょうが、シラバスに記載されていない実験もできるようです。自分の興味のある分野の研究が行われているなら、交渉してみると良いでしょう。

自分は研究者になろうと思っている方も、そうでない方も、ぜひ一度は基礎系の選択コースを受けてみて下さい。必ず興味深い体験ができると思います。

編集後記

〝当たり前〟のことは本当に当たり前なのだろうか。ついつい〝当たり前〟と思い込んでしまってはいないだろうか。学食の営業終了を知らせる突然の一報に接して、ふとそんな事を考えた。

自分の眼で美しい風景を眺め、自分の耳で軽やかな小鳥のさえずりを聞く。しかし、視力・聴力を失った患者さんにとっては、もはや当たり前のことではない。健康に日々を送れるということは、それだけで充分に幸せなはずである。健康の問題だけではない。当たり前のように定時運行の電車に乗って、当たり前のように電子メールをやり取りする。学食の話もそうだが、どれほどの人々の貢献によってその〝当たり前〟が達成されているのか、日頃は考えもしない。当たり前のことに対して、いつも感謝しながら生きていきたいものである。

さて、2月号では恒例の退職教授挨拶として、増子教授にインタビューをお願いし、魚住教授からは御寄稿を頂戴した。お二方の長年の功績に敬意を表しつつ、あらためて深く御礼申し上げたい。なお、紙面の都合により、連載企画『いだいのいきもの』、『医学部の風景』は休載した。ますますパワーアップする次号以降に御期待いただきたい。

（倉岡）

新聞編集委員

倉岡晃夫教授（編集長）
河野　史教授、新地浩一教授、尾崎岩太准教授、柴田健太郎助手、壹岐聡一朗、合田夏希、鈴木源晟（医6）、橋本健太（医5）、大野渚、西原歩美、藤田真衣（医3）、岩永鴻之介（医2）

要望などの連絡先
学生サービス課総務
gkseigkm@mail.admin.saga-u.ac.jp